

# ディズニー作品にみる黒人表象

法学部法律学科3年 若松 彩音

- I. 序論：ディズニー作品と人種差別
- II. 『南部の唄』と『プリンセスと魔法のキス』
  - (1) 作品の梗概
  - (2) 映画の背景：アメリカ南部の歴史
  - (3) 映画公開当時の評価とその妥当性
- III. 黒人の「語り」
  - (1) 「語り」の文化
  - (2) 白人の聴衆・読者・観客
- IV. ブルースの文脈
  - (1) 黒人の音楽
  - (2) ブルースの暗さ
- V. 自然と結びつく黒人観
  - (1) ステレオタイプの表象
  - (2) 21世紀の黒人表象
- VI. 結論：止まらない漂白
- VII. 参考文献

## I. 序論：ディズニー作品と人種差別

---

2014年10月、映画『Frozen』を大ヒットさせたディズニーが、早くもエルサとアナに続く新プリンセスを初公開した。2016年末公開予定の『Moana』では、モアナ・ワイアリキというポリネシア人のプリンセスを登場させる。昨今、ディズニーは人種のるつぼに象徴される多民族国家アメリカ文化の一つとして、積極的に多様性を包含する作品に取り組んでいる。特にプリンセス・シリーズでは、1992年に『Aladdin』で初の白人でないプリンセスキャラクター、ジャスミンを作って以来、ムーラン、ポカホンタスとそれまでステレオタイプであった白人プリンセスとは、異なるプリンセスイメージをつくっている。

中でも、2009年に公開された『The Princess and the Frog』はディズニー初のアフリカ系アメリカ人のプリンセス作品として注目された。これは、1946年の『Song of the South』をはじめとするディズニー作品において、黒人に対する人種差別的な表象を含むと批判された背景を考慮すると、ディズニーが改めて黒人表象に向き合った作品として注目に値する。

東京ディズニーランドの人気アトラクションであるスプラッシュマウンテンで流れる「Zip-A-Dee-Doo-Dah」はまさしく『Song of the South』の挿入歌であり、慣れ親しむ人々も多い。一方で、本作はその黒人と白人の友好的な様子を描いた牧歌的情景が、奴隷制度によって黒人たちが圧迫を受けた実際の南部アメリカを美化した作品として多くの批判が寄せられた。1986年以降、ディズニー側の自主規制により一度も再公開されておらず、ソフト化されていない作品である。それに対して、『The Princess and the Frog』では、歯抜けなホタルのレイが主人公たちの友人として出てくる点、シーンの多くで主人公であるティアナがカエルとして登場する点等を批判されることはあるものの、『Song of the South』公開時にみられたNAACP（National Association for the Advancement of Colored People）によるディズニーへの抗議声明といった大きな批判は寄せられてはいない。

しかし、批判の有無によらず『Song of the South』と『The Princess and the Frog』を吟味すると、これらの作品に見られる黒人表象は、粗野な黒人、スラム街、麻薬といったあからさまな人種的ステレオタイプというよりもむしろ、アメリカ社会に潜在的に存在する黒人のイメージを肯定するものとなっている。本論においては2つの作品に共通する黒人表象を読みとくことで、ディズニー作品が具現化するアメリカ社会が潜在的に抱く黒人イメージの問題性を明らかにする。

## II. 『南部の唄』と『プリンセスと魔法のキス』

---

### (1) 作品の梗概

『Song of the South』は1946年にウォルト・ディズニー・プロダクションにより制作された長編映画作品である。白人少年とリーマスおじさんの交流を描く実写のパートとリーマスおじさんの話す動物譚のアニメーションで構成されている。アトランタからアメリカ南部の農場へ移住した白人少年のジョニーは、仕事のためにアトランタへ戻る父親と離れてしまう。ジョニーの寂しい思いを慰めたのは、村一番お話が上手い農場の下働きの黒人・リーマスおじさんであった。彼のウサギどんのお話を聞くうちに、ジョニーは心を開く。しかし、ジョニーの母親は、ジョニーがリーマスおじさんのお話に夢中になることを快く思わず、ある日をきっかけにリーマスおじさんに二度とジョニーに近づかないように言い渡してしまう。ジョニーはリーマスおじさんを追いかけて、牛と接触し意識不明になる。リーマスおじさんの声がけによって目を覚ましたジョニーは南部へ帰ってきた父とともに、幸せに過ごす。

他方、『Princess and the Frog』は、2009年にディズニーアニメーションとして公開され、初のアフリカ系アメリカ人プリンセスである点、かつ、主人公の黒人少女ティアナの大きな特徴として、王子に救われる必要がない自立したプリンセスであることが注目された。1920年代のニューオーリンズのフレンチ・クォーターに住む少女ティアナは、父との夢であるレ

レストランを経営するため、熱心に働いていた。不動産を買おうとするも、困難が降りかかるティアナの前に人語を話すカエルが現れる。カエルは、魔法をかけられてしまったマルドニア王子のナヴィーンだと名乗り、人間に戻るためにキスしてくれるように彼女に頼む。ティアナが躊躇しながらキスをするが、二人はカエルの姿となってしまう、人間に戻るべく冒険を始める。自分の一番大切なものは夢ではなく、愛する人と過ごすことだと気付いたティアナは、カエルのままナヴィーンとの愛を誓う。呪いは解け、人間に戻ったティアナとナヴィーンは二人で夢のレストランを経営していつまでも幸せに暮らす。

## (2) 映画の背景：アメリカ南部の歴史

それぞれの映画の舞台となった南部アメリカの歴史を以下にまとめておく。アメリカは、リンカンが奴隷解放宣言を行い、1865年に南北戦争終結した後、南部再建期に突入した。この時期の南部は、黒人は奴隷から解放されて比較的自由を与えられた。しかし、その自由も束の間であり、公共施設・交通機関においても黒人と白人が厳密に分けられる時代へと移っていく。1896年には、プレッシー対ファーガソン判決において、「分離すれども平等」の判決文が出た。これは、1954年のブラウン対教育委員会判決で否定され、公民権運動により同等の権利を求める声が挙がるまで、まかりとおった。実際に、1946年の『Song of the South』の公開当時、主人公リーマスおじさんを演じた黒人俳優 James Baskett が、劇場において行われた人種隔離の影響で初上演プレミアショーに出演できなかったことから明らかである。1920年代（第一次世界大戦後の空前のジャズ・エイジである）のニューオーリンズを描く『Princess and the Frog』でも、ティアナの家族が住むのは親友シャーロットの南部富裕層から離れた黒人街であり、黒人コミュニティで自慢のガンボを振舞う様子が描かれており、「分離すれども平等」な時代を描写していると考えられる。

## (3) 映画公開当時の評価とその妥当性

ここで、『Song of the South』に対する批判を吟味するに、NAACPは、白人にとって好都合な黒人をステレオタイプ化したという点と、作品内で描かれる対等な白人と黒人の交流は当時のアメリカではあり得ず、誤った歴史認識を招くおそれがある点で、ディズニーを批判している。前者の白人にとって好都合な黒人のステレオタイプとは、白人に対して従順な白人が望む黒人像であるリーマスおじさんだけでなく、『Gone with the Wind』に続いて Hattie McDaniel が演じた黒人女性特有の“Mammy”のステレオタイプの侍女や、ジョニーの友人となる黒人少年トビーが“Coon”のステレオタイプである点が挙げられる。

しかし、後者の誤った歴史認識か否かは、確かに黒人が奴隷としてプランテーション農場で強制労働をしていた歴史から、黒人と白人の融和は当時なかったと考えるのも妥当である。一方で、『Song of the South』の原作となる Joel Chandler Harris の『Uncle Remus Tale』は、奴隷制度の残る南北戦争以前の南部アメリカはなく、むしろ1865年の南北戦争終結後

つまり、南部再建期を舞台としている点を踏まえなければならない。ディズニーが南部再建期の自由を楽しんでいる黒人を取り上げて描こうとしたのであれば、寄せられた批判が妥当かは検討の余地があると考えられるであろう。

『Princess and the Frog』に対しては、「黒人少女が心から受け入れられるもの」<sup>1</sup>と、待望の黒人プリンセスとして歓迎されることもあった。もちろん歓迎のみではなく先述の通り、歯抜けホテルの友人の存在や、なぜ黒人プリンセスが映画の大半をカエルとして過ごさなければならないかといった批判も存在する。ここではその批判の中でも、王子ナヴィーンは果たして何者かについて言及する。

ディズニーはナヴィーンを「白人ではない」<sup>2</sup>と断言している。彼の出身は「マルドニア」という架空の王国であり、彼の肌は黒というより茶色く、髪にも黒人に見られる特徴はないことから、黒人でもなさそうだ。また、ブラジルの俳優である Bruno Campos を声優としている。ティアナが黒人のプリンセスであることは明らかであるが、その王子ナヴィーンの出自は不明なのだ。黒人の声を書く Web サイト AOL の Angela Bronner Helm は「明らかにディズニーは黒人男性が王子にふさわしいとは思っていない」<sup>3</sup>と指摘する。確かに黒人男性のディズニーアイコンが生まれなかった。が、仮にナヴィーンの出生を明らかにした時、もしそれが黒人であったとすれば、黒人は黒人と結ばれるべきだという意識の表出であるという批判が出るジレンマに陥ったはずである。ディズニーが、ナヴィーンは何者かを定義しないことには、黒人プリンスをうみだすことへの抵抗感よりもむしろ黒人女性のパートナーに対するステレオタイプの作出を避ける意図があったとも考えられるのではないか。

以上に述べた二つのディズニー作品に対する批判は、アメリカ南部と黒人の歴史の美化やあからさまな人種差別のステレオタイプに対する批判であるが、次章より、これらの作品にみられる黒人表象の特徴を考察する中で、ディズニー作品の黒人表象における本質的な問題点を見出していく。

### III. 黒人の「語り」

---

#### (1) 「語り」の文化

かつて、黒人コミュニティにおいて「語る」ことは、先人の知恵を若者に伝達させる方法であり、欠かせない文化であった。奴隷制度下の黒人たちは、存在否定、残虐行為、束縛によって、彼らのアイデンティティと文化意識を維持することが難しかった。その中でも、不屈の精神で、奴隷制度が強い主人の文化に対する服従に抗い、集団内部における儀式、歌、

---

<sup>1</sup> Ajay Gehlawat, "The Strange Case of the Princess and the Frog: Passing and the Elision of Race," p. 431.

<sup>2</sup> Gehlawat, p.423.

<sup>3</sup> Gehlawat, p.423.

物語を通して先祖の過去を保持した。

『Song of the South』のリーマスおじさんが語るうさぎどんの動物譚もまさしくその一つであり、作中でも、リーマスおじさんが黒人の子どもたちに語り聞かせをするところに、白人少年のジョニーが遭遇している。

『Princess and the Frog』においても、「語る」ことの重要性は変わらない。幼いティアナとシャーロットに、ティアナの母ユードラはグリム童話の『かえるの王様』を語り聞かせる。また、ティアナの父ジェームズは、ティアナにレストランの夢を叶えるために、星に願うのではなく努力することが大事であるという処世訓を与える。ティアナが夢を実現するために勤労するきっかけとなる点で、父の「語り」が重要な意味を持つことは明らかである。さらに、ティアナの父との回想シーンは冒頭のみならず、夢のレストランかナヴィーンの愛かを選ぶ重要な最終局面においても、ブードゥー教の魔術師ドクター・ファシリエの手によって再現されている。過去の回想が作中に含まれることは、他のディズニープリンセス作品において類を見ない特徴であり、ディズニーは、重要な黒人文化である過去から現在への伝承という「語る」ことの本質を捉えているといえるのではないか。

また、カエルになったティアナとナヴィーンがあてにする不思議な力をもつママ・オーデイは、Coleen Salley という児童文学朗読家をモデルにしている。ディズニーは、黒人文化と「語る」ことに強いつながりを見出し、両作品に共通して「語る」黒人像を描いていると考えるのが妥当であろう。

## (2) 白人の聴衆・読者・観客

ここで、『Song of the South』に寄せられる批判の一つとして、リーマスおじさんが語る対象が白人少年ジョニーである点が指摘される。先述の通り、「語る」ことは白人の奴隷所有者に対して、先祖の過去を黒人内部でのみ共有するために生まれた文化である。白人に語ることによって、いわば黒人社会の文化が搾取される。作中のみならず、原作者である Harris とその読者も白人であったこと、そして、ディズニー映画『Song of the South』の観客も白人であったと想定できる点から、黒人文化が白人に消費されていると批判された。

それに対して、『Princess and the Frog』では、ティアナたち黒人家族内での本質的な「語り」が描かれている点、および、映画の観客もまた黒人、特に黒人少女を想定している点で白人による文化の搾取はないと言えるかもしれない。だが、この黒人社会への内的ベクトルを持った「語り」の本質への回帰は、再び人種による分離を促す危険性をはらんでいるとも考えられる。ナヴィーン王子がなかなか現れないことを嘆き、星に願うシャーロットに、ティアナは父の教えを説くも彼女が聞き入れることはない。夢を実現させるのは、父つまり過去の教えを生かしたティアナであったが、ディズニーは、シャーロットをその成功を見てもなお、教えを共有することはなく、ナヴィーンの弟と結婚を待つことを冗談めいたタッチで描いている。つまり、『Princess and the Frog』において、黒人の成功のプロセスは、白人にはあてはまらない様子が描かれており、「語る」ことの本質は見出したものの、そのことで

結果的に黒人と白人を分けてしまっており、この点において『Song of the South』よりも問題をはらんでいると考えられる。

#### IV. ブルースの文脈

---

##### (1) 黒人の音楽

先述した「語る」ことと同様に、黒人集団内部を結ぶために重要な役割を持ったのが音楽であった。黒人音楽のひとつであるブルースは、南北戦争後のアメリカ南部ミシシッピ州デルタ地方における黒人の生活が基となっている。デルタでは、中近代的な投資資本、交通網、世界経済の営業を強く受けたため、多くのシェアロッパーが賃金労働者へと変身した。大多数の黒人が自分の土地を持って耕すことを夢見ていたが、シェアクロッピングによってその夢は打ち砕かれた。その新天地でも恵まれなかった疎外感、欲求不満、幻滅を歌い上げたのがブルースである。

オーガスト・ウィルソンの劇『マ・レイニーズ・ブラック・ボトム』では、ブルースについて、ただ気持ちよくなるために歌うのではなく、人生を理解する方法だから歌うと主張する。そのブルースの特徴として、まさしく blues と憂鬱なことを歌い、暗さもまた重要な要素である。この音楽性は文学作品にも影響し、黒人を描く文学作品の特徴の一つとして、ブルースと同様に暗さもまた重要なエッセンスとして物語を構成することが挙げられる。たとえば、『フレデリック・ダグラス自叙伝；アメリカの奴隷』において、Frederick Douglass はキャラクターに明暗のコントラストをつけて、ブルース音楽の系譜で書き表している。

##### (2) ブルースの暗さ

黒人文化のもつコンテクストとは対照的に、ディズニー作品の大きな特徴の一つは、ハッピーエンドにある。実際、『Song of the South』も『Princess and the Frog』もともにハッピーエンドだ。しかし、『Song of the South』では、牛と接触して意識を失うジョニーが描かれている。また、『Princess and the Frog』では、ホテルのレイがヴィランズであるドクター・ファシリエによって踏みつぶされ、亡くなって憧れの星エヴァンジェリーンのとなりで輝くようになる。エヴァンジェリーンの近くでレイが幸せではあるかもしれないが、ディズニー作品において主人公の友人であるサブキャラクターが亡くなってしまうプロットは少ない。ディズニーも黒人を描写する作品の際に、コントラス（特に暗さ）をつけるブルース音楽の手法を黒人の文化として、意図的か、潜在的かに使っていると言えるのではないだろうか。

## V. 自然と結びつく黒人観

---

### (1) ステレオタイプの表象

Douglas Brode はディズニーの黒人表象について興味深い仮説をたてている。作品全体で白人と黒人の融和が印象的な『Song of the South』であるが、リーマスおじさんを追いかけて牛に体当たりを受けたジョニーの意識が戻らないシーンで、アフリカ系アメリカ人たちによるゴスペルつまり讃美歌が流れることを融和という側面ではなく、むしろディズニーが黒人をより精神的であり、神や自然に白人よりも近い存在として描写していることが分かるシーンだと主張する<sup>4</sup>。

黒人たちは、「子どもじみた」、「文明化されていない」「劣っている」といったステレオタイプに悩まされてきた。数あるアフリカ系アメリカ人文化の諸特徴のうちでも、かつて白人捕縛者が嘲笑の的としたのは黒人が「超自然的なもの」<sup>5</sup>を好む点であった。白人が、ミンストレル・ショーで、白人の目から見て異質であったアメリカ黒人の（生活の）特徴を、模倣し、茶化して、白人のためのエンターテインメントとして消費したことからも明らかである。この意識は、アメリカの一部が抱いていたものでは決してない。アメリカの英雄たちも持っていたほど根強いものである。Thomas Jefferson は「黒人は初めから別個の人種であるにせよ、時間や環境によって異なったものになったにせよ、ひょっとしたら肉体的にも精神的にも白人よりその資質が劣っているのではないか」<sup>6</sup>と述べ、リンカンもまたダグラス論争（1858）において白人と黒人の間に肉体的相違があると考えていたことが明らかになっている。生物学的にも、Josiah C. Nott および George Gliddon（1868）は黒人の頭蓋骨をチンパンジーよりも膨らんでおらず、顎が伸びていると記述し、黒人は他のすべての人種より、さらにサルよりも低いランクであると証明しようとするなど、黒人の悩みは絶えなかった。

### (2) 21世紀の黒人表象

黒人のアメリカ大統領が生まれた現代において、黒人に対する「超自然的」で「劣っている」ステレオタイプは決別したかのように思われる。『Princess and the Frog』を手がけたディズニープロデューサー Peter del Vecho も、彼らが生み出した黒人プリンセス、ティアナを「機知に富んだ（resourceful）才能ある（talented）女性」<sup>7</sup>であると言及する。また、ディズニープリンセス初の王子に頼る必要のない自立したプリンセスとして黒人女性の地位向上を認めているようにも思える。

しかし、ストーリーにおいて、ティアナは自身のレストラン経営の夢を実現するために勤

---

<sup>4</sup> Douglas Brode, *Multiculturalism and the Mouse: Race and Sex in Disney Entertainment*, p. 61.

<sup>5</sup> Imamu Amiri Baraka, 『ブルース・ピープル：白いアメリカ、黒い音楽』 p. 144.

<sup>6</sup> Stephen Jay Gould, 『人間の測りまちがい：差別の科学史』, p.94.

<sup>7</sup> Gehlawat, p.427.

劣な姿勢で貯金を続けるが、カエルとなった王子に会う晩に、不動産屋のフェナー兄弟に夢の実現を否定されている。最後にはその夢をかなえることになるが、その夢はカエルという人間以外の動物になり、自然界を冒険した後だ。ティアナが人間として、シャーロットと同じ南部郊外で過ごすシーンは、冒頭とラストのシーンのみである。Ajay Gehlawat は『Princess and the Frog』の表象として、ティアナという黒人の主人公が夢をかなえるために必要なのは、一般的に夢を実現させるための知性や理性にかなったアプローチではなく、むしろ彼女がカエルとなって飛び回る鈍臭さに必要性を見出している点を問題視している<sup>8</sup>。ティアナは、飛び回る minstrel・ショーにも一種似たカエルとしての苦労を経ずに、夢をかなえることができなかつたのか。そこには、未だ克服できないアメリカ全体に潜在する黒人への「超自然的」で「劣った」ステレオタイプがあり、ディズニーにも未だ『Song of the South』を経て、乗り越えたはずの差別的な黒人表象の壁が残っているようだ。

## VI. 結論：止まらない漂白

---

『Princess and the Frog』は、ディズニーが批判の予想された黒人表象に再び取り組み、黒人の少女たちのアイコンとなるプリンセス、ティアナをつくりだした点で価値のある作品である。アメリカ南部の事実を歪曲すると批判の多かつた『Song of the South』でも、ディズニーは、黒人文化における「語る」ことの重要性、ブルース音楽の系譜によるプロット作成の特徴を捉えたうえで、黒人表象に取り組んでおり、人種差別で最も恐ろしい他者への無理解・無関心には陥っていないことがうかがえる。しかし、アメリカ建国時から染みついてしまった、アメリカ社会に潜在する黒人が「劣っている」「自然的である」の意識を変えることは『Song of the South』発表からおおよそ50年後につくられた『Princess and the Frog』でもなお、できていない。

最後に、『Song of the South』への批判の一つとして、問題となった実写部分を取り除いて、ディズニーが『Zip-A-Dee-Do-Dah』といった楽曲、およびアニメーション部分だけをパッケージ化して、今なお多くの人に売り出している点が挙げられる。この「漂白」化は『Song of the South』だけではない。『Princess and the Frog』でも、ティアナをイメージしたプリンセスグッズで、その黒い肌を「漂白」し、むしろドレスの色（カエルの象徴である緑）をウリにすることで人気をはかっているものもある。ティアナが「本来の色を全て消し去」って<sup>9</sup>、皮肉にも黒人プリンセスは自然的なカエルの緑こそがアイコンとなっている。

マイノリティにもスポットを当て、多民族国家アメリカのイメージを発信するカンパニーを目指すディズニーではあるが、黒人の過去の反省を継承する文化を、ちょうどシャーロ

---

<sup>8</sup> Gehlawat, p.418.

<sup>9</sup> Gehlawat, p.429.



ットがティアナを真似ることがなかったように軽んじているため、シャーロット同様にその目標を達成することは難しいであろう。

## VII. 参考文献

---

- Baraka, Imamu Amiri. 飯野友幸訳. 『ブルース・ピープル：白いアメリカ、黒い音楽』. 東京: 平凡社, 2011.
- Barnes, Brooks. "Her Prince has Come. Critics, Too." *New York Times* (2009)
- Brode, Douglas. *Multiculturalism and the Mouse: Race and Sex in Disney Entertainment*. 1st ed. ed. Austin: University of Texas Press, 2005.
- Campbell, Neil, and Alasdair Kean. 徳永由紀子訳. 『アメリカン・カルチュラル・スタディーズ：ポスト9・11からみるアメリカ文化』. 第2版. 奈良: 萌書房, 2012.
- Gehlawat, Ajay. "The Strange Case of the Princess and the Frog: Passing and the Elision of Race." *Journal of African American Studies* 14.4 (2010): 417-31.
- Gould, Stephen Jay. 鈴木善次訳. 『人間の測りまちがい：差別の科学史』. 増補改訂版. 東京: 河出書房新社, 1998.
- Levine, Robert S., and Samuel Otter. *Frederick Douglass & Herman Melville: Essays in Relation*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2008. Print.
- Vardaman, James M. 『ふたつのアメリカ史：南部人から見た真実のアメリカ』. 東京: 東京書籍, 2003.
- 越智 博美. 『モダニズムの南部的瞬間：アメリカ南部詩人と冷戦』. 東京: 研究社, 2012.
- 鈴木, 透. 『実験国家アメリカの履歴書：社会・文化・歴史にみる統合と多元化の軌跡』. 東京: 慶應義塾大学出版会, 2003.